

## はじめに——同い年の明暗

新型コロナウイルスに明け暮れた二〇二〇年、NHKの朝の連続テレビ小説は『エール』だった。国民的作曲家と称される古関裕而・金子夫妻をモデルにしたドラマである。

古関は一九〇九年に福島に生まれているが、同じ年に川柳作家、鶴彬が石川県河北郡高松町たかまつで生まれた。本名を喜多一二きたかつしという鶴は、

万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た  
手と足をもいだ丸太にしてかへし

などの激越な川柳を発表して捕えられ、一九三八年九月十四日、二十九歳で獄中死した。その前年に日中戦争が始まり、古関は、

へ勝って来るぞと 勇ましく

の「露営の歌」で作曲家としての華々しいスタートを切る。

古関の曲には「愛国の花」もあるが、国を無条件に、あるいは無邪気に信じた古関と、それを最期まで疑い続けた鶴の、あまりにも非情な明暗だった。

古関は西条八十さいじやうやその作詞で、

へ若い血潮の予科練の

七つ釘ばたんは桜いかりに錨

という「若鷺わかわしの歌」も作っている。

西条と古関のコンビで作られた「比島決戦の歌」では、

へいざ来い

ニミッツ マッカーサー

出て来りゃ 地獄へ逆落し

とまで書いたので、二人は、戦後、米軍によって絞首刑にされるのではないかと恐れたという。

しかし、問題にするまでもないということと不問に付された。古関は自らの戦争責任を感ずることはなかったのか。もちろん、同い年の鶴が早々に国家によって虐殺されたことなど想像したこともなかっただろう。

戦後は一転して原爆許すまじの願いを込めて「長崎の鐘」を作曲した。私はそれを素直には領けない。

古関の自伝『鐘よ 鳴り響け』によれば、古関は一九四五年に入ってまもなく、海軍人事局から「特幹練（特別幹部練習生）の歌」の作曲を依頼される。作詞は西条で、「『若鷺の歌』以上のものを期待する」と言われた。

ところが、三月に入って突然、召集令状が届く。古関は驚いて海軍人事局に飛んで行き、令状を見せた。

古関は本名が古関勇治で、福島連隊区司令部では古関裕而とは気づかず、令状を発行してしまったのである。

担当将校はそう説明した後で、

「しかし一度、出した召集令は取り消すことはできません。今『特幹練の歌』の作曲をお願いしている時ですから、作詞ができるまで一週間くらい、入団していらっしやい。ちょうど体験のためにはいいチャンスで、いい作曲ができるでしょう。海軍の人事はすべてこの管轄ですから、間もなく召集解除します」

と言った。

そして、およそ一カ月後に解除となった。

軍歌を作曲したことでそうなったことについて、古関は何の矛盾も感じていない。

歌は時に軍人の号令以上に人を動かす。十七歳で海軍に「志願」し、「若鷺の歌」などを歌った作家の城山三郎は、拙著『酒は涙か溜息か——古賀政男の人生とメロディ』に触

れて、私が古関の話をすると、涙を流しながら、

「激しい怒りを感じる」

と身体からだをふるわせた。

古関は自衛隊の隊歌も作っているが、鶴の苛烈で短い生涯と対比する時、私も城山と同じように怒りに身体をふるわせないわけにはいかない。

古関ではなく、鶴の生き方と川柳をこそ後世に伝えるべきと思って、私はこの本を書く。